

南方圏における中高年世代のバドミントンクラブ活動形態について

Badminton Club Activities among Middle-Aged and Older People in the Southern Region

北 村 優 明 山 下 賢 一
Masaaki KITAMURA Kenichi YAMASHITA

北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報 第4号 2013

Bulletin of the Northern Regions Lifelong Sports Research Center Hokusho University Vol.4

南方圏における中高年世代のバドミントンクラブ活動形態について

Badminton Club Activities among Middle-Aged and Older People in the Southern Region

北村 優明¹⁾ 山下 賢一²⁾

Masaaki KITAMURA¹⁾ Kenichi YAMASHITA²⁾

キーワード：南方圏，バドミントン，トリプルス，中高年バドミントンクラブ

I. はじめに

本報告は，南方圏における生涯スポーツとしてのバドミントンの現状を理解するために，2013年2月22日から26日にかけて台湾台北市にて実施した，2回目の視察についてのものである。

今回は，釧根地区バドミントン協会と，中華台北市バドミントン協会との親善交流試合のために，北村研究員がコーチとして，釧根地区バドミントン協会より招聘されたことにより視察が実現した。

この親善交流試合自体の目的は以下の通りである。

釧根地区バドミントン協会は，2010年に中国福建省との日中成人スポーツ交流事業（日本体育協会主催）を受け入れ，両国の親善と友好を深めると共に，スポーツ振興を図ることができた。また，2011年にはニトリプレゼンツ・サルルンカムイプロジェクトにより，釧路市動物園から台北市立動物園へ丹頂鶴が2羽寄贈された。

今回はこのことを機に両市に所在する協会の親善と友好を深め，スポーツ交流を通じてトリプルス（競技）を研修することを目的とする。

スポル研究に於いても2回目の視察として，台湾バドミントン協会副会長兼秘書長頼聯旺（ライリエンワン）氏と対面し，バドミントントリプルスの世界大会における資料提供があり，大会運営についてインタビューを行った。また，施設並びに運営方法について現地にて調査を行った。

II. 親善交流試合概要

今回の親善交流試合で訪問した台北市は，中華民国（台湾）の首都で，260万人以上が暮らすアジア圏でも屈指の大都市である。台北盆地に位置し，市内中心部は清時代の遺構や，日本統治時代の建築物なども多くみられる。新千歳空港からは直行便で，4時間程度の身近な位置にある。

親善交流試合は，釧根地区バドミントン協会側は11名，台湾の中華全民羽球協會からは14名の参加があった。参加者一覧は以下の通りである。

表1 釧根地区バドミントン協会参加者一覧

区分	氏名	所属
団長	草島 守之	協会長・釧路市議会議員
	草島 浩子	協会長夫人
監督	谷口 秀生	協会理事長
コーチ	北村 優明	北翔大学生涯スポーツ学部
選手	山下 茂	協会副理事長・釧路市学校教育部
選手	吉田 茂徳	釧路市中央消防署
選手	山木 誠一	協会理事・北海道釧路江南高等学校教諭
選手	木曾 孝洋	協会副理事長・工藤写真館株
選手	佐藤 友介	協会理事・北海道釧路湖陵高等学校教諭
選手	辰山 功一	協会理事・北海道釧路商業高等学校教諭
選手	守屋 正人	協会理事・北海道釧路江南高等学校教諭

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

2) 北海道札幌琴似工業高等学校

表2 中華全民羽球協會参加者一覧

氏名	所属
吳俊彦 (ウージュンイェン)	全民羽協協會會長
李淑美 (リーシュメイ)	全民羽協協會會長夫人
賴聯旺 (ライリイェンワン)	全民羽協協會副會長兼秘書長
林昶成 (リンロンチョン)	全民羽協協會副秘書長
楊繼美 (ヤンジーメイ)	全民羽協協會副秘書長夫人, 競賽組長
王瑋禧 (ワンチアンシー)	全民羽協協會副秘書長
程嘉彦 (チョンジャイェン)	全民羽協協會理事
賴秀月 (ライシュユエ)	全民羽協協會理事夫人
張文松 (チャンウェンソン)	全民羽協協會客座教練
謝卉俐 (シェフウイリー)	全民羽協協會接待
蕭博仁 (シャオブォレン)	全民羽協協會顧問, 台北市立大同高中教師
鍾明達 (ジョンミンダー)	全民羽協協會顧問, 成淵羽球隊
趙貽鐸 (チャオイードウォ)	全民羽協協會顧問, 台北市立南港高工教師
吳煥昌 (ウーファンチャン)	全民羽協協會顧問, 台北市立南港高工教師



写真3 台湾製バドミントン器具

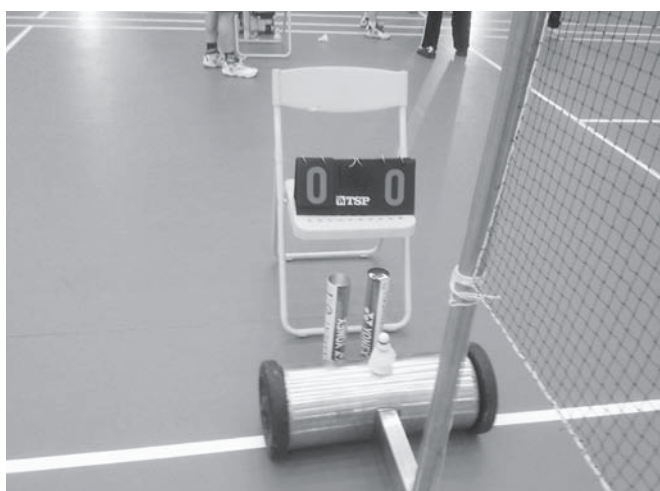


写真4 台湾製バドミントン器具



写真1 交流会参加者集合写真



写真2 台北市立大同高校バドミントン専用体育館

日程は2月22日から2月26日までの5日間で、親善交流試合は3日目の2月24日に行われた。会場となったのは台北市立大同高校のバドミントン専用体育館である。開始式では釧根地区バドミントン協会会長の草島守之氏が挨拶をし、中華全民羽球協會副會長兼秘書長の賴聯旺氏が通訳するという場面もあった。

台湾側の選手団には、元台湾チャンピオンである張文松氏も参加しており、大変な歓迎を受けた。今回の交流は、台湾で盛んに行われているバドミントントリプルの研究という側面があった。台湾側にもその旨を伝え、トリプルでの交流を目的としていたが、現地の競技者によると、トリプルは選手3名の合計年齢が200歳以上でなければ実施しないということで、ダブルスとシングルスのみでの交流試合となった。

試合は元台湾チャンピオン張文松氏を擁する中華全民羽球協會が優位な展開が多く、釧根地区バドミントン協会は圧倒されることが多かった。中でも台湾の高校教諭吳煥昌氏は、専門がラグビーであるにもかかわらず、非

常に機敏な動きをしており、バドミントンが盛んな台湾の実力を感じた。

途中、中華全民羽球協會側と交渉し、特別にトリプルの対戦が実施された。実際にトリプルスを行ったことで、選手3名の合計年齢200歳以上という決まりについて見えてきた点がある。それは中高年への配慮という点である。今回は特別に合計年齢が200歳に満たない状態でトリプルスを実施したが、相手チームとの年齢差があるためか、動きが激しく更に人数を増やしたいと感じることさえあった。これを合計年齢200歳以上とすることで、両チームの体力面でもバランスがとれ、動きが多少緩やかになったとしても競技としての楽しみを損なうことがないと感じた。この合計年齢に関する決まりは、多くの年代でバドミントン競技人口の多い台湾ならではの中高年プレーヤーに対する優しさでもあるのかもしれない。

試合終了後は会場近くのレストランにて、交流食事が実施された。食事会では記念品の交換などを行い、次回は是非釧路でバドミントンをと誓い合って幕を閉じた。

Ⅲ. 台湾における中高年バドミントンの活動状況

日程4日目の2月25日には、台湾の中高年バドミントン愛好者の活動状況を調査した。

筆者は平成16年に北海道・アルバータ親善スポーツ交流に参加し、北方圏諸国とのスポーツ交流や発展・競技力向上についての研究を行った。そのときの視察で感じた格式の高いクラブ運営や、バドミントンの伝統的な競技を厳格に教育しクラブ運営をしている状況は、同じ北方圏である北海道のクラブ運営に大いに参考となった。

しかし、南方圏の台湾の中高年のスポーツクラブに参加する方は、格式や伝統にはとらわれず、日の出と共に皆が山の中にある約600面のコートを一斉に使用し始め



写真5 アウトドアコート（床面はコンクリート仕様）



写真6 アウトドアコートとサロン（右上）



写真7 山道を上がるとすぐコートがある

る。暗黙のルールとして、中高年は山の麓から使用し、山の上に行くに従い若者が利用することになっている。カナダ同様、日本とは異なるクラブ運営が図られている。

また、競技から離れた人たちもサロンに集いレクリエーションを楽しんでいる。視察をした筆者らが日本人であることを知り、日本語でのカラオケを披露したり、共に合唱したりとフレンドリーな歓迎を受けた。台湾ではアウトドアバドミントンが盛んであり、コートはコンクリート製で足場が悪いにもかかわらず、比較的気温が低い朝方のゲームをゆったりと9時過ぎまで楽しんでいる風景は庶民的で、高齢者が孤独にならないような配慮がされていると推察でき、感銘を受けた。日本が参考にすべき、スポーツを通し現状のような高齢者の孤立による悲劇を改善するための一つの手段として参考になるものと思われる。



写真8 プレーする人たち（床面は土仕様）



写真11 山の中にあるコートの使用注意事項の看板



写真9 サロンからみたジャングルに位置するコート



写真10 プレーをしない人たちが集うサロン

IV. まとめ

もともとバドミントンは、19世紀にイギリスの羽根突き遊び「バトルドアーアンドシャトルコック」が発祥とされる。紳士淑女がインドアのクラブ内サロンで待ち合わせのためシルクハットをかぶり、スコッチを飲みながら、二つの部屋でシャトルを打ち合いながら楽しんでいたとされている。しかし、その元になったのは、1820年頃にインドのボンベイ地方で行われた「プーナ」というネットを挟んで革製の玉をラケットで打ち合う遊びであり、アウトドアのゲームであった。故に、台湾で行われている山の中でのレクリエーション型バドミントンは、斯様なものかと納得がいくものであった。

まさしく、目の前で繰り広げられていた中高年の文化的集いや、レクリエーションバドミントンは心身ともに健やかな生活を与えるものと思われ、これこそが生涯スポーツとしてのバドミントンにふさわしいありようであった。

付 記

本研究は、平成23年度から平成25年度文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の助成を受けて実施したものである。

文 献

- 1) 北村優明, 小島一夫: カナダ国・アルバータ州におけるバドミントン競技の強化策について. 北翔大学生涯学習研究所研究紀要 生涯学習研究と実践, 11: 81-91, 2008.